

NPO 法人歴史資料継承機構じゃんぴん第 21 回例会

無形民俗文化財の継承の課題と取り組み～東北地方の事例より～

2018,1,13 (土) 16:00～18:00

於) 学習院大学北 2 号館 212 号室

報告者: 田仲 桂

はじめに

少子高齢化や価値観の変容などによる後継者不足で、文化財の継承が困難な状況が生まれている。本報告では無形民俗文化財、とりわけ民俗芸能（郷土芸能）に焦点をあて、芸能団体の様々な取り組みから継承するためのヒントを考える。

1、郷土芸能を継承するために必要なものは？

2、取り組み事例

(1) 事例紹介

(岩手県) 柿内沢鹿踊保存会・鬼柳鬼剣舞保存会、(山形県) 綱木獅子踊り保存会、(宮城県) 女川港大漁獅子舞まむし、(福島県) 上遠野町青年会・江名諏訪神社文化伝統保存会・下神谷子どもじゃんがら・大國魂神社大和舞伝承会・下綴青年会・磐城じゃんがら彩志会・室原郷土芸能保存会・請戸芸能保存会など

(2) 個別事例より～下高久八幡神社例大祭執行委員会の三匹獅子舞～

<概要>

- ・秋の例大祭で、三匹獅子舞と子どもによる棒使い・剣舞などを奉納
- ・地区を 4 つのグループに分けて輪番で担当。全世帯が費用と労働力を負担
- ・下高久は土地地区画整理事業で農地を宅地に転用・売却できない、新しい住民が入らない

<現状と課題、それに対する執行委員会の動き>

- ・世帯数減少にともなう負担増 → 枠組みの再編成、金銭負担の軽減化
- ・後継者不足 → 枠組みの再編成、経験者に再依頼、女性の参加を許す
- ・2010 年に県の重要無形民俗文化財に指定 → 県指定のステータスを PR しようという動き
- ・2012 年に区内に仮設住宅が建てられる → 2015 年から祭りのルート変更 (仮設での奉納)

<報告者の取り組み、それに対する地域の反応>

- ・2008 年から「笛見習い」として参加、その後 映像作家・写真家らと記録、地域住民へのインタビュー、ダンサーを招聘して祭りにて子ども対象の WS を実施
- ・型を壊す・視点を変える・入り口を増やす・裾野を広げる、残していくための選択肢を提示
- ・一部の地域住民より反発があり、人間関係に影響を及ぼした

(3) 課題と解消法

- ・(人) 移住者を受け入れる(国籍を不問にする) / 地域外の人を受け入れる
- ・(人) 年齢制限の廃止 / 性別の廃止
- ・(人) 後継者育成 / 下部組織を作る / 学校教育(総合学習の時間)の素材にする
- ・(修得) 映像の活用 / 教材の活用 / 道具の変容
- ・(連携) 団体同士の合併 / 連合チーム / 「連絡協議会」等の設立
- ・(連携) 学校・公民館・行政との連携
- ・(お金) 補助金・助成金の確保 / 企業の協賛
- ・(そのほか) イベント出演 / 情報発信 / メディアの活用 / 文化財指定

3、継承の課題を解消した結果あらわれる可能性のある事象

- 担い手の緩和 ⇒ ①担い手・後継者が確保できる / 新たな関係者(見守る眼差し)ができる
②意味が変容する / タブーが破られる / 芸が変化する(省略や簡略化)
- 修得手段の変化 ⇒ ①身体能力の後退にそった対応
②かつての身体的能力の喪失がより助長される
- 支援金の獲得 ⇒ ①道具・設備・体制が充実 / 組織を維持しやすい
②人間関係に癒着あるいは亀裂が入る
- イベント出演 ⇒ ①担い手のモチベーションUP / 芸が維持されやすい
②芸が変化する(ショー化) / 芸能の在り方や意味が変容する(観光化)
- 団体同士の連携 ⇒ ①情報交換できる / 継承のノウハウを共有できる / 相互扶助できる
②派閥争い・権力争い / 人間関係に亀裂が入って活動できなくなる団体も

4、最後に

(1) 東日本大震災における福島県の民俗芸能の被災状況

- ・津波で少なくとも約60ヶ所の集落が壊滅し、原発事故の影響で約200ヶ所以上の集落が避難
- ・震災前の県内の芸能団体は約800団体(浜通りは約430団体)、震災後に住所確認できたのは約700団体(浜通りは約350団体)、うち約6割が継承の危機に瀕した。その後浜通りでは50団体が復活(2015年10月末現在)
- ・文化庁をはじめ財団・企業・NPO・ボランティアなどによる様々な支援(道具・衣装・保管場所・情報発信・奉納・披露の場、etc.etc...)

(2) 時代や地域に合った残し方が必要

- ・継承に対する考え方や方法は時代や地域によって異なる。どこに価値をおきどんな方法を選ぶか、様々な選択肢から選ぶのは地域住民である。ただし、熱意のある人の考え方や行動によって継承の方向性は決まりやすい側面がある
- ・いうまでもなく郷土芸能を継承することの意味は非常に大きなものである。とはいえ、やむを得ず「眠らせる」ことを選択するのも一つの有り方。研究者の役割の一つは、後世の誰かが復活させたいと思ったときのための「材料」を残すことである